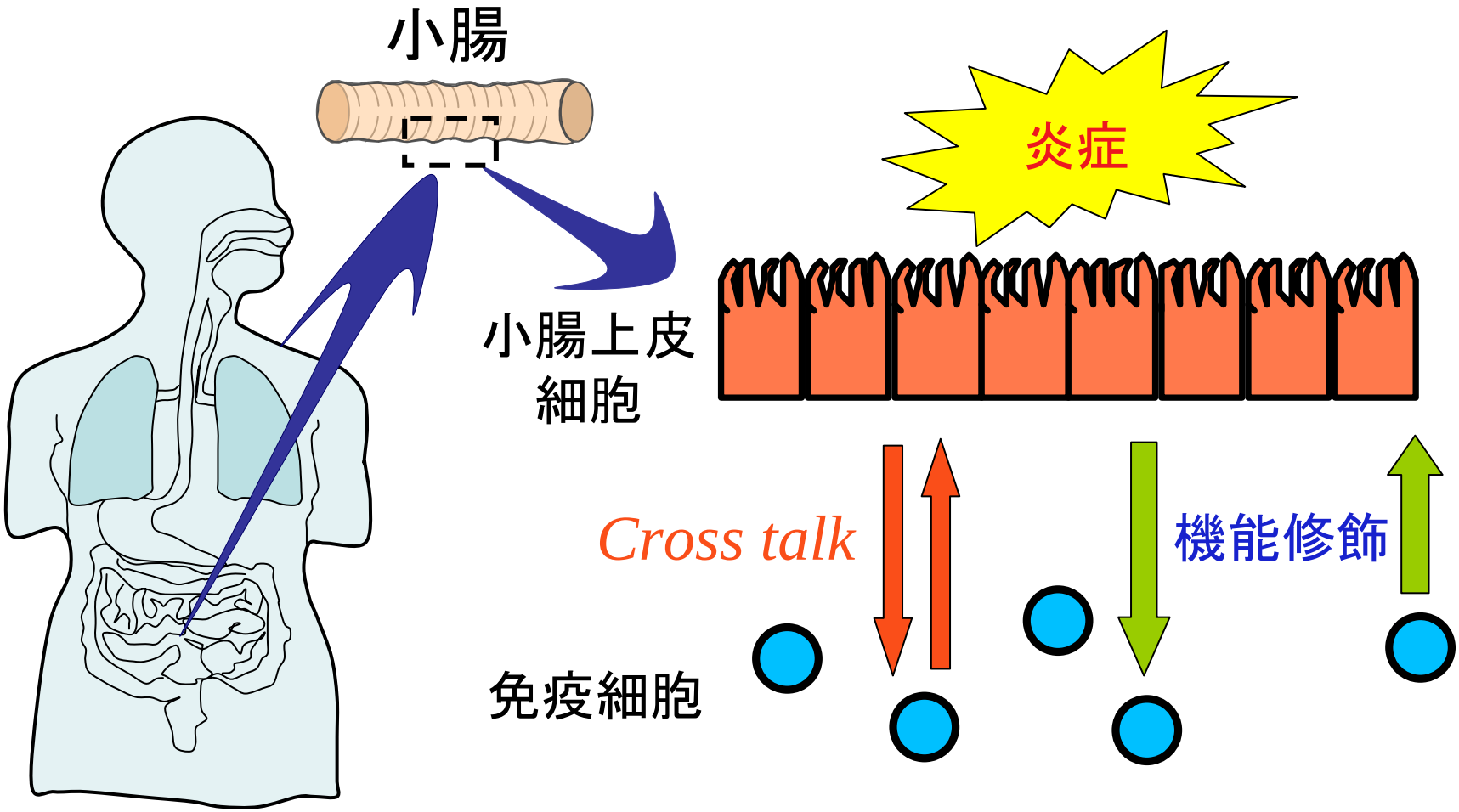
農学生命科学研究科における研究交流の現状とAGRI-COCOONへ対する期待

21世紀農学コロキアム第1回ワークショップ(ACT1)

2006年1月27日

東京大学大学院　農学生命科学研究科
応用生命化学専攻

森　暁


小腸
炎症
小腸上皮
細胞
Cross talk
機能修飾
免疫細胞

農学生命科学研究科における研究交流

～私の経験をもとに～

研究の中で、新しい実験手法を試そうとした時・・・

1. すでに経験のある院生、スタッフに教わる

一番簡単な方法。確実に信頼できる結果が得られる。
オリジナリティが出せなくなる危険性も。（人のマネ）

2. 学術論文を参考にして自分でプロトコルを組み立てる

とりあえず実験を遂行することはできるが、
ベストの成果が出たかどうか分からない。
（論文には実験上のコツ等書かれていない。）

農学生命科学研究科における研究交流

～私の経験をもとに～

各研究室ごとに得意・不得意、慣れ・不慣れがある？

他の研究室の友人と話した時、同じ実験手法でも
それぞれの研究室独自のプロトコルを持っている。

→それらを擦り合わせていけばより良い、精度の高い
研究ができるのではないか。

現状：研究室間の横のつながりが不足。

農学生命科学研究科では幅広い研究が行われて
おり、研究におけるヒントが研究科内で得られる
可能性は決して低くない。時には違う刺激も大事。

大学院での授業　～若かりし日の思い出～

・半年間、一つの講議テーマに沿って各専門の先生が講議
オムニバス形式が主流。
時には外部の研究機関、企業の先生が話をされる

ある種、産学官民の連携、学際的とも言える。

しかし、面白くない授業が多い！

Q. なぜ面白くないと感じるのか？
A.　・専門用語の多さ
　　・前置きの短さ
　　・「この研究のどこがどう面白いのか」が伝わらない

AGRI-COCOONへ期待すること

・各専攻、研究室の枠を超えた横のつながりを
各研究室の研究内容、研究成果のデータベース化
→研究競争の点もあるため、どこまで実現可能か？

・AGRI-COCOONならではの講議
今までの大学院での講議と同じではAGRI-COCOONは
成功しない。
興味を持てる第一歩を踏み出せれば十分。
深い専門性までは必要ないのでは。

・気軽に情報交換を行える場になってほしい。
よろず相談所的な存在
人的交流を第一の目的とした懇親会（飲み会）の開催
飲み会での交流はバカにできない！